平成２７年度精神科在院患者調査の概要【速報版】

1. 在院患者の状況

平成27年6月30日時点における在院患者総数は16,611人となっており、昨年度調査と比較すると282人減少している。

|  |
| --- |
| ■在院患者数の推移 |
| 年度 | H23 | H24 | H25 | H26 | H27 |
| 在院患者数 | 17,613 | 17,489 | 17,161 | 16,893 | 16,611 |
| 前年度との差 | --- | ▲124 | ▲328 | ▲268 | ▲282 |
| 病床数 | 19,564 | 19,564 | 19,489 | 19,489 | 18,894 |
| 前年度との差 | --- | --- | ▲75 | --- | ▲595 |
| 充足率 | 90.0% | 89.4% | 88.1% | 86.7% | 87.9% |

『年齢区分』では、60歳以上が在院患者総数の63.1％を占めている。

『入院形態区分』では、「医療保護入院（50.4％）」が最も多く、「任意入院（49.0％）」と合わせると在院患者総数の99.4％を占めている。

『疾患名区分』では、「統合失調症、統合失調症型障害及び妄想性障害（F2）」が最も多いが、在院患者数は年々減少しており、昨年度調査と比較すると282人減少している。

|  |
| --- |
| ■疾患名区分別在院患者数の推移 |
| 年度 | H23 | H24 | H25 | H26 | H27 |
| 症状性を含む器質性精神障害（F0） | 3,884 | 3,811 | 3,818 | 3,760 | 3,765 |
| 精神作用物質使用による精神及び行動の障害（F1） | 1,009 | 1,001 | 1,059 | 1,086 | 1,034 |
| 統合失調症、統合失調症型障害及び妄想性障害（F2） | 10,079 | 9,673 | 9,520 | 9,376 | 9,111 |
| 気分（感情）障害（F3） | 1,573 | 1,647 | 1,572 | 1,584 | 1,628 |
| 神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害（F4） | 272 | 284 | 272 | 269 | 287 |
| 生理的障害及び身体的要因に関連した行動症候群（F5） | 60 | 72 | 43 | 49 | 62 |
| 成人の人格及び行動の障害（F6） | 65 | 67 | 67 | 45 | 49 |
| 精神遅滞（F7） | 378 | 609 | 471 | 391 | 372 |
| 心理的発達の障害（F8） | 66 | 83 | 90 | 117 | 112 |
| 小児期及び青年期の通常発症する行動及び情緒の障害及び特定不能の精神障害（F9） | 43 | 26 | 41 | 26 | 34 |
| てんかん（症状性を含む器質性障害(F0)に属さないもの） | 93 | 101 | 87 | 77 | 64 |
| その他 | 91 | 115 | 121 | 113 | 93 |
| 総計 | 17,613 | 17,489 | 17,161 | 16,893 | 16,611 |

『在院期間区分』では、在院1年以上の長期在院患者数は年々減少しており、昨年度調査と比較すると112人減少している。

『状態像区分』では、軽度・中等度群が9,703人（58.4％）、重度・最重度群が4,731人（28.5％）、寛解・院内寛解群が2,177人（13.1％）となっている。

1. 地域移行支援の必要性（可能性）

寛解・院内寛解群2,177人のうち、地域移行支援の利用が「可能（必要）」と回答があった方は566人であった。

『年齢区分』をみると、「60歳代」が128人（総数の22.6％）と最も多く、「50歳代」が107人（総数の18.9％）、「40歳代」が97人（総数の17.1％）となっており、60歳以上は総数の52.1％を占めている。

『在院期間区分』をみると、在院1年未満が266人（総数の47.0％）、在院1年以上は300人（総数の53.0％）となっており、60歳以上かつ在院1年以上の方は173人（総数の30.6％）となっている。

『疾患名区分』をみると、「統合失調症、統合失調症型障害及び妄想性障害（F2）」が287人（総数の50.7％）と最も多く、「症状性を含む器質性精神障害（F0）」が96人（総数の17.0％）、「気分（感情）障害（F3）」が80人（総数の14.1％）と続いている。

1. 退院阻害要因

寛解・院内寛解群2,177人のうち、「退院阻害要因がある」在院患者は1,145人（総数の52.6％）であった。

『退院阻害要因』を年齢階層別にみると、60歳未満では「現実認識が乏しい」が最も多く、「病状が不安定」、「退院による環境変化への不安が強い」の順であり、60歳以上では、「退院意欲が乏しい」が最も多く、「退院による環境変化への不安が強い」、「現実認識が乏しい」の順となっている。

『退院阻害要因』を在院期間別にみると、「病識がなく通院服薬の中断が予測される」、「退院意欲が乏しい」、「退院による環境変化への不安が強い」、「援助者との対人関係がもてない」、「家族から退院に反対がある」の回答が在院期間が長いほど高くなっている。



